＝　ラストメッセージ･かくあるべし　＝

早いもので…、などというと年末を思い浮かべるが、ヘルメットをかぶった労働運動家（あくまで自薦）としての我が組合活動も卒業の時が来た。

委員長メッセージを綴って丸６年、愛読？いただいた方々には、硬い・ふざけすぎ・笑える等々、いろんな受け止めがあったと聞くが、執筆を始めた当初のお約束は違えていないつもりである。

2017年９月の第１号には、「～前略～　具体的な取り組みに向けては、加盟組合と、その構成組織、県本部・県センターをはじめ、組合員の皆さんとの心合わせの重要性を再認識し、実効あるFace to face活動を行うこととしました。その一環として、この９月より、毎月、時に可笑しく、時に真面目に、私見を交えながら委員長メッセージを発信していきたい…」と。

私事になるが、21歳で支部役員・青年婦人部長（当時の役職名）に、そして29歳で単組専従役員に。65 歳を迎えるこの年まで、第一線の組合役員として勤めてこられたのは、諸先輩のご指導と加盟組合の仲間、そして共に働いた役職員みなさんのおかげ、感謝しかない。

労働組合の役員は組織人としての苦労もある。上部団体等への派遣しかり。何度かお話ししたが故郷・大分～東京を行ったり来たり。2000 年９月から４年間新日鉄労連本部に、前回メッセージで触れた2006年９月から４年間、そして2014年９月から今日まで基幹労連に。

はじめて東京に赴任した翌年 2001 年５月に妻方の母が「くも膜下出血」による突然の他界。翌月６月には悪性リンパ腫と診断され余命３か月と宣告を受けていた母が、９か月にわたる闘病の末帰らぬ人に。そして昨年12月、「来年には帰ってきますよ」、と約束をしていた義父がこの世を去った。３人の親の死に目に間に会えず、悲しみを共にしてあげられなかった妻には詫びのしようもない。

そんななかでも気をしっかり持てたのは、仲間の支えと激励であった。いつぞやも綴ったが、母の葬儀に帰る飛行機の中、雑誌のコラムで見つけた言葉は、私の労働運動の糧となってきた。「神様がくれた最高の宝物は家族、自らつくる最大の宝物は友達」、その言葉を思い出すたびに涙が溢れるが、自らに言い聞かせてきたのは、神様がくれた家族という最高の宝物は年齢とともに少なくなっていくが、自らつくる仲間という最大の宝物はもっともっと増やせる。労働運動に携わる私への母からの最期の贈りものとして今日までやりきることができた。

足もと、私たちを取り巻く環境は経済・社会共に大変革期を迎えている。新型コロナウイルスの感染拡大によって見えてきた社会の脆弱さ、そのもとで社会弱者といわれる人たちのセーフティーネットをどう確立するか、税と社会保障による負担と給付の問題、ＡＩやＩＯＴによるデジタル社会における陽の当たる場所と、その裏側に潜む影をどう捉え、どう対処していくのかは労働界全体の課題でもある。

それらに加え、ものづくり産業は、もっと大きな課題も抱えている。超少子高齢社会における労働人口の減少は、人材の確保・定着を危うくし、人材獲得競争へとつながる待ったなしの課題。そして、資源・エネルギー問題、ＧＸ（グリーン・トランスフォーメーション）、脱炭素社会をめざすカーボンニュートラルへの挑戦は産業・企業の生き残りと、私たちの雇用と生活の安心・安定を揺るがす課題でもある。

ならば、労働運動もまた、変化への対応力に磨きをかけていかなくてはならない。製鉄・製鋼、造船、石炭産業の世界文化遺産への登録に中心的役割を果たされた加

藤康子（こうこ）さんの言葉が心に残っている。「再生可能エネルギーだけで電力を賄えないことが明らかならば、原子力発電所の再稼働は必要。政治家がそのことを云う覚悟がなくてカーボンニュートラルを掲げるべきではありません。」

少なくとも、技術革新が進み、産業も、民生も実装できるまでの間は、現実的な対応が必要であり、私たちの雇用と生活を守り続けるためには、基幹産業であるものづくり産業の基盤確立と、新たな国際競争に対峙できる体制の整備が欠かせない。そして、持続可能な経済・社会を形作るために政労使、産官学を挙げた取り組みが重要となる。

その実効力を上げるために政治のプロセスを通じた取り組みの重要性は言うまでもない。だからこそ、みんなで、悩み苦しみ、とにかく勝つことに執着した 2022 年７月 10 日施行の第 26 回参議院議員選挙での捲土重来、村田きょうこの当選は、基幹労連政策の推進に向けた道を拓く出来事でもあった。

これからも時代は変わりゆき、今では想像もできない世の中になるかもしれない。しかし、2003 年９月９日の結成以来、20 年の月日を歩んできた基幹労連、そしてその礎をつくってきた鉄鋼、造船重機、非鉄、建設の歴史は、先達が常に先を見据えて造り上げてきたものである。これからも、その熱い思いを忘れることなく、現実を見据え、その先の政策をつくり、掲げ、実践に移していくことを期待している。

コロナ禍の３年と半年、基幹労連の仲間たちは、国内外で、昼夜を分かたず、苦しい想いや愚痴は胸の内に納め、懸命に働き続けてきた。それは、その努力が職場を守り、企業基盤を確立し、家族を守ることにつながるとの熱い想いからであったろう。

その仲間たちのために、労働組合があるとするならば、「組合員とその家族の幸せ追求」を変わらぬ究極の目的として掲げ続けなければならない。

いかなる環境変化があろうとも、常にど真ん中に人を据え、仲間の安全と健康を守り、明日のため今、成すべき運動を前に前に進めいくことを願ってやまない。

信頼する後輩たちに後を託し、お世話になった各労組の皆さんに、そして愛してやまない仲間たちと役職員の皆さんに、あらためて感謝を申し上げ、延べ 17 年間の単身赴任生活に別れを告げる。

「貴方の幸せと貴女の幸せは、きっと違うけど、幸せと思えるときの笑顔は同じ。」みんなの笑顔がずーっと、続きますように。遠い大分の空の下より祈っています。

ご安全に

2023年８月１日

日本基幹産業労働組合連合会

中央執行委員長　神田 健一